

Title	世界都市大柏林の地理学的研究 ( Friedrich Leyden: Gross-Berlin: Geographie der Weltstadt. 1933. Verlag-Ferdinand Hirt in Breslau )
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.11 (1933. 11) ,p.1747(141)- 1755(149)
JaLC DOI	10.14991/001.19331101-0141
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19331101-0141">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19331101-0141</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(3) Godwin は性交が最も完全なる自由の原理の上に置かれても、それによつて亂婚が生ずるが如きことは無いと考へる。Malthus はこの考を批評して『此の點に於いては余も亦同感である。變化を好むの情は一種の放縱なる墮落した且つ不自然な趣味であつて、簡素にして道徳的な社會状態に於いては、恐らくは廣く行はれ得ないものであるからである。恐らく各人は自らその配偶を選擇し、兩者が好んで其結合を續くる限り、長く相互の愛着が續けられるであらう』(既出『マルサス人口論』三二—三三頁)と云つて居る。

乍併それ等の道徳的賦性は、婚姻に於ける制度的要求と結ぶことに依つてはじめて、その社會的效力を發揮したと云ふべく、少くともゲネオノミー的手段としての私有財産制の確保の爲には、自然一夫一婦の原則を育成し、而して之れを、その確立にまで到らしめたであらう。この意味よりすれば、『一夫一婦の原則』及これに照應する現在の婚姻形式は婚姻に於ける『經濟』の、實際的要求の道徳的反映及その具體的結果である。殊に私有財産制度そのものが發達するに従ひ、制度それ自身の方が前方に押し出されて來ると、既に婚姻は、——多少の修辭的許容、論理的強調が許さるゝならば——私有財産制度確保の爲め的手段、或はこれと共に發生し、その發展と共に發展して行つた制度であると云ふ前記諸説者の議論にも、充分の道理を認めなければならぬであらう。

附記 本篇は、續篇『婚姻の制度的特性或は經濟性』を俟つて、はじめて略その所期の論述を遂ぐるものにして、この意味に於ては、本稿は、その續篇と合せて一篇たるべき論稿の一部分なり。論じて盡さざるところは、後續の補足論稿の補正するところに期す。なほ本論は去る六月中一度脱稿し、後八月初旬改稿再度脱稿したる儘今回發表の機を得る迄、その儘存置せるものにして、その上梓校正に際しては肯て姑らく添削するところなし。

## 世界都市大柏林の地理學的研究

(Friedrich Leyden: Gross-Berlin: Geographie der Weltstadt. 1933.  
Verlag-Ferdinand Hirt in Breslau)

奥井復太郎

獨逸の首都、柏林市は一九二〇年に市域大擴張を行つてシャロッテンブルク、シェーネベルク、ウァルマアスドルフ、シュパンゲウ、ケベニツク其他を包含し、舊來の中央區、ティアーガルテン、ウェッディング、プレントラウア・ベルク、フリードリッヒ・ハイン、クロイツベルクを中心にして名實共に世界的大都市となり、新しき柏林市を構成した。正式には其の名稱は依然として柏林市であるが、俗稱は此の面積八八、三六八ヘクタール、人口四百三十三萬人(一九三〇)に及ぶ世界的大都市を大柏林と呼んでゐる、此處に紹介する著書は、此の新しき柏林市、即ち大柏林市に就いての地理學的(或ひはもつと正しく云へば人文地理學的)研究である。

先づ内容から、一瞥しよう。(一)地形地勢(二)氣候(三)植物(四)聚落核心(五)大柏林(六)人口(七)交通(八)經濟(九)柏林と「柏林ツ子」更に文献及び統計表。書中七十三の圖表を藏し、卷末に「等時間距離」を示した柏林市地圖を添へてゐる。全部で二二二頁本文は一八四頁。材料は其の序文にも云ふ如く一九三三年二月迄のものであつて、其

の後の變化は遺憾乍ら取り入れる事が出来なかつた」とあるが、従つて、伯林市について纏めあげられたるものとしての最新著作であると云つて差支ない(勿論市廳其の他關係の公にする資料等をもつと最近のものがあるとしても)。

著者に就いては評者寡聞にして知る所がない、しかし地理學專攻者である事だけは、本書の副題及び「ゲオポリテイク誌」地質學協會雜誌等に於ける論稿によつて推察し得るが、更に又、社會科學的な知識は、書中、諸處に隱見してゐる。前記「ゲオポリテイク誌」の論文は「根なき大都市の一例としての伯林(一九三三)の標題を有し、此の問題は本書に於いては、結論にも該當すべき「伯林及び伯林ツ子」の中に取扱はれてゐるが、茲には著者の現代大都市觀があらはれてゐると云つて差支ない。

扱、本書に論ずるところの内容に就いてあるが前記目次中(一)(二)(三)の純自然地理學的方面に就いては多言を要しない。評者の興趣は寧ろ第四項の「聚落核心」以降に懸つてゐる。著者の主力も亦、此の方面に注がれたと見て差支ない、即ち本文一八四頁に對し地形地勢、氣候、植物の三項は僅かに一九頁を占めるに過ぎない。之れは大都市地理學に於いては當然な事と云はねばならぬ。

聚落核心——は大柏林市の地域に寧て所在した聚落の核心を農村的都會的核心の兩方面に分て論じてゐる。其の分布は圖を以つて示されてゐる(三二頁第九圖)、都會的聚落核心としてはシュパンダウ、ケエベニツク、シャロツテンブルク、伯林(舊)が論ぜられ其の歴史的生成を主としてゐる。舊伯林市に就いて云へば、歴史的伯林市(本當の意味?)で云ふアルト・ベルリン、スプレー河の東北岸を基に幾次の擴張をかさねてたが、既に「西への進出」の傾向は歴然としてゐた(五四頁)しかし、當時の西部は、現在の、ブランデンブルク門より、ポツダム廣場に到る南

北線の東側迄のものであり、其れに次いで「西への進出」は漸くティアガルテン區に止まつてゐたものであつた。

大柏林——大柏林の行政的成立は地理的經濟的社會的大柏林成立への追従に外ならぬ。故に此の項目に於いては、聚落地理學的に大柏林を構成するに至つた所謂、郊外が研究されてゐる。鐵道環狀線<sup>ライン</sup>を越えての發展は、西南方に於いてはウキルマアスドルフを経てファンゼー(ウ區に編入されてゐる)の森林帶を含みツェーレンドルフ區を以つてポツダムに境を接してゐる。西方はシュパンダウ區を編入してハーヴェル河湖地方を控え、北西部はライネツケンドルフ區に於いてテール湖に及ぶ。北部はパンコフ區を形成するものであるが、此の地域はまだ充分な市街地と稱するを得ないものがあり、北東部のワイセンゼー區と共に伯林市に於いて有名なラウベンコロニーの所在地として知られてゐる。此の東北、北の兩部は、舊市街に接する一部は兎に角少し離れては都會的色彩の比較的乏しきところと云はねばならぬ。東方はリヒテンベルク區を爲すもの、既に大都市的形態を備へてゐる。東南部はトレプトウ、ケエベニツクの兩區、前のリヒテムベルク、更に南方ノイケェルンと併せていづれも工業地區を爲す。南部はテムベルホフ區、シュテグリッツの兩區、内側にシェーネベルク區を圍つてゐる。

しかし大體に於いてリングバーンが大都市々街地の限界と見られてゐる(六三頁)聚落地理又は都市地理學的には、此の限界を越えた外方輪には、非都會的な存在が大柏林市の市域に含まれてゐるのを看逃し得ない(六三頁)しかし、現代に於ける大都市の景觀は必ずしも、雜沓喧騒の市街地區に於いてのみ求むる可きものでなからう。都市計畫は地方計畫(リージョナル・プランニング)への合理的發展によつて、非都會的な景觀を多分以上に含めつゝある。

人口——大柏林の成立は巨大な人口の集積及び其の分布的變化に依據する。世界大都市として四百萬以上の人口

を有するに乍らず、舊市域の有する飽和人口は二百萬内外を限度とする。故に四百萬餘の人口は新市域への分布を包括せしめて求め得る數字である。郊外に於ける巨大なる人口、殊に其の増加率は、此の項に取扱はれてゐる、第二四、二五の圖表は舊伯林市、シャロットテンブルク、ウキルマアスドルフ、ノイケェルン、シェーネベルク、リヒテンベルク等が或は一八五〇—一九一〇年、或ひは更に新しく一八九〇—一九〇〇年の期間に躍進的増加率を持つてゐた事を示してゐる。第十九世紀後半より一九二五年乃至三〇年に至る新舊市内の各地區の人口數は卷末の表(第四、五)に掲げられてゐる。

此の項での興味は、(一)伯林市に於ける都心地區の構成(City-bildung)と(二)人種的政治的宗教的地域別との研究にある。前者は都心地區の人口減退として現はれ、第三六圖—第三九圖、第四〇圖及び卷末の人口數表によつて示されてゐる。歴史的舊伯林市及びその附近の如きは、或ひは一八六七年、乃至一八九〇年の頃の人口を以つて、從來人口數の最大限を記録してゐる。各地區に於いて異なるが一九二五年迄の人口減退率の最大は六割乃至八割に及ぶものが都心地域に求められ、それ丈け是等の地域が所謂シテイとなりつゝあるわけである。

第二の人種的地域別は主として猶太人の居住地域である、所謂ウエステンは彼等、殊に富裕なる者のクォータとして著名であり、之れも歴史的経過によつて舊市内の西部より新市内の西方へと進出して來てゐる(第四一、四二圖)中心部北側に於ける猶太人地域は所謂「金の無い猶太人」の密集地で、東方より移住して來た、ロシア乃至波蘭猶太人によつて代表されてゐる。

政治的地域別は、普魯西邦會又は獨逸國會の議員投票數を基準として調査したもので一九三〇年の獨逸國會、三二一年の普魯西邦會の成績によつて、ナチオナルゾチアリスト、ドイッチェナチオナル、ツェントルーム、共產黨、社

民黨、シュターツパルタイ等に分けて大伯林市の分布を示してゐる。共產黨はウエディングを主として(四五—三五、パアセント)東部方面に根據を有するに反し社民黨は東南部、西部(シェパンダウ)に勢力を有し他の地域には、比較的均分せるに、ナチスは一八三二年の普魯西邦會の選舉に斷然擡頭しツェーレンドルフ、シュテグリッツ、シェーンベルクの三區に著しき勢力を示し、主として西部を根據としてゐる。ツェントルーム、シュターツパルタイは東南部に僅かの地盤を持つてゐる。宗教的分布(加特力、無宗教)は、此の政治的分布に、主として社會主義的傾向に就いて一致を示してゐる。

是等の興味ある分布研究は、住宅密度とも關係を保ち、更に後段、産業的分布と最も密接な連絡をとる。

なほ、此の項には、一定地域に於ける土着、來住者の研究が附加され、新市域に、當然、來住者によつて充滿されてゐる状態を調査してゐる(卷末第六表)此の點は後段に於いて著者をして大都市觀を披瀝せしむる契機となつてゐる。

交通——都市の擴大は交通機關の完備である。評者も最近の研究に於いて都心地への交通時間距離一時間を以つて、その都市の外輪と考へてゐる。明治年代の舊市内境界、大正年間の大森近郊、現代の横濱乃至湘南地方は、この意味に於いて東京市の地域の擴大を物語る三階程であらう。本書の著者は、此の項に於いて「等時間圖」を作成してゐる。アレキサンダア廣場及びウキッテンベルク廣場の二中心を基準として、二〇、四〇、六〇分の等時間圈を表はした。これによれば、市内、及び近郊交通機關を利用して、ほど大伯林の境界へ兩中心地より、約一時間の交通距離である。(第五四、五五圖及び附録地圖參照)遠距離交通機關を用ふれば又、問題は別である(第五六圖參照)若し、此の大都市地域に均分的な平等の發展を望むならば、此の等時間圈が出來得る限り正圓に近似しなければな

らぬ。若し著しき複雑な入江的彎曲を示す場合には、その彎曲間隙中に、發展の後れた地域を存在せしめる。著者は、此の點よりして、縁邊をつなぐ交叉點、即ち外側環狀交通機關の設立を待望してゐる。

本項に於ける調査は、其の他に、景氣と交通量(第五七圖)自動車交通、及交通事故等が含まれてゐる。

經濟——大都市研究に於いて其の構成上最重要な部門は、經濟又は産業關係である。此の項には(一)市民の職業別地域性の研究(第五九圖)家庭使用人は東南部の富裕地域、殊にウァルマアスドルフ、ツェーレンドルフに多い)農業、森林地帯の調査(二)特定職業の立地點及び地域的序列の研究、即ち金屬機械工業、精巧工業レンズ、電気工業等の規模別調査(第六二、六三圖)印刷複製業の分布(之れ等は、洋服製造業などと共に都心的産業である)所謂、新聞社街(フリードリッヒシュタット南部)飲食店分布、銀行街(ウンター・デン・リンデン南方)官衙地域(ティアガルテン區及びウァルヘルム街の附近)更に公私常設市場及び定期市場分布(公設定期市場が市の東南部に多いと云ふ事は、此の地域に利用者の多い事を物語るからして、間接にその土地柄の説明となる)等々が論ぜられ、いづれも興味深い結果があげられてゐる。

要するに伯林の工業地帯は、舊市域の北西及び南東部にあると云つて差支なく、職業人口の分布も工業手工業に於いては、此の方面に最大率(五〇—六一%)を示してゐる。自由職業の多いのはツェーレンドルフ(二〇—一五%)を主としてウァルマアスドルフ、シュテグリッツ、シェーネベルク、シャロットテンブルク、ティアガルテンの相互隣接區(各々二〇—一〇%つゞ)であつて所謂ウエステン及び西南部である。各區に於ける住民總數に對する各職業別人口の比率は卷末の第九表に詳細な記録がある。

(三)水路 (四)國有鐵道と貨物運送 (五)伯林市と國民・世界經濟的交錯、以上が「經濟」に關する項の全部である。

る。

伯林及び伯林ツ子——これが最後の項であつて、此の研究の結論に該當するもの、著者の大都市觀、伯林批評を含み、更に伯林市區制改正案の批判にまで及んでゐる。

先づ著者は、伯林市民が土ッ子でない點、即ち無郷土的である點、<sup>ツェルツェルローゼ</sup>根無しである事を指摘する。一九二〇年に於いては伯林市人口の唯三分の一が土地生れであつた。しかも其等の人々は其の先代が他國者である場合を少しとしない。急激なる所謂「米國的テムボ」を以つて發展した近郊に於いては殊に此の傾向が著しい。例へばシェーネベルクに於いては一八九一—一八九五年間の増加率一八・三%に就いて其の内の一〇四は來住者による増加である。而して問題は是等の來住者、又は全伯林市としての他國者は、土地の歴史、傳統を尊重しない。彼等は伯林市又は其の郊外、舊市町村に對してハイマートロスである。土地に愛着も傳統も持たぬ事は、地理學的の立場から云ふと所謂「根なし」状態と云ふワケであらう。しかし著者は此の場合、地理よりも歴史の領域に多分足をふみ込んでゐる。歴史と傳統の香の高い南部又は西南部、或ひは北部獨逸都市の景觀を以つてすれば、確かに伯林市は新しい、従つて現代的大都市形態に對抗するものとしての歴史的勢力は微弱である。著者が伯林市の米國化を忌む所に、強ひて云へば郷土主義の持つ反動的色彩が窺れる。が、ハイマートロスは唯に伯林丈けの特色でなく、資本主義都會の通有的性質である。しかし著者の云ふ様に、伯林市の歴史的新しき事は、確かに、資本主義的特色の發揮を阻止する有力な反對力を備へなかつたであらう、丁度、米國の都市が典型的資本主義都市であるように。此の意味では獨逸の他の大中小都市に比して伯林はより、多くアメリカ的だと云ふ事が出来る。茲に於いて、伯林及び伯林人は、獨逸的伯林獨特の型體も文化も持たなかつたし、又持つてゐないと云ふ結論になる。伯林は之れ迄に自己から生れ出



でた独自の文化をつくり出す事が出来なかつた。唯外來の變化の多い勢力の球遊びに過ぎなかつた。巧緻に代つて單なる事業熱が、独自の趣味に代つて無思慮な模倣が勢力を占めてゐる(一七六頁)

土地に根を持つ事は土地を愛する事である。右造建築の密集した町、其處には、伯林市民は單調、平凡、卑俗以外に何等救を求め得ない。従つて彼等は、郊外に、河湖、山村に休日の逃避を試みる。之れが伯林市を中心とした休日の「民族移動」である。しかも此の休日利用法も交通機關の不備其の他によつて雑踏混雑を伴ふ、確かに伯林人の機智が此の不愉快な情勢を救ふ。しかし著者は地理學者丈に此の市民の自然愛好、土地への接近によつて、彼等が再び土地に根をはる努力を持つてゐる事を見出して些か自からを慰めてゐる(一七八頁)彼が勞働者階級の慰藉的の方法としてのラウベンコロニーに就いて論ずるも、亦、此の邊に關係を持つてゐる(第五節参照)大伯林市の精神的具象的結合は伯林人が従來より強大の郷土感を持つ事、世界大都市に於いても自然と人間との多くの内的交渉を可能ならしめる事が、その前提である。(一八二頁)

以上のような都市觀から彼は伯林市區劃地域改正を論じてゐるが之れは別問題になるから、唯、著者は土地の實際上の情況と歴史的に基いた、這般の改正は所謂地理的文化的區劃を以つてすべきであると主張してゐる事を掲げるに止める。

あらゆる反歴史性に反抗して現實の強制は再び生成物に接近して行く。以前の近隣地域の郷土感こそ、後期の來住者が根を張る可き指導觀念である。「新しき大伯林の行政構成が此の基礎事實を無視せしめ、住民の意識に何等根ざしてゐない人爲的な路線及び區劃網を市域に敷く限り、從來の生成物の廢棄を強調して激しき矛盾に當面しなければならぬ限り、大伯林は統一的結合のない多數たるに留まり、全伯林人の郷土感は遂に自からを主張するを得ない

いであらう(一八二頁)

以上フリードリッヒ・ライデンの「大伯林」を内容的に紹介且つ批評して來た。最後に評者として云ふ可き點は、先づ此の書は大伯林人文地理學書である事、同時にすぐ前に述べた様に著者は多分に米國的大都市に反感を示してゐる事、都市と自然との調和を期圖してゐる事等が指摘される。個々の點に就いては別段に、新發見と思はる可き理論は遺憾乍ら見出し得ない。都市社會學的觀點で見れば、從來の所説、理論が纏められてあるに過ぎない。諸種の統計、數字についての工作も、既に得られた他の資料の加工に外ならぬ。しかし、此の平凡性にも拘らず、伯林市の如き大都市に就いて内容的に諸方面を二〇〇頁以内に纏め上げた點は大いに認めて差支ない。この意味で我國都市研究者にとつて好箇の參考書且つモデルたるを得るものとして推薦したい。(昭和八年十月五日)